まろびゆく球のあとおふ武夫(たけを)らの銀(ぎん)の上衣(うはぎぬ)日にきらめくも
亂れあひもつれあひつゝ人と馬一つとなればまた解けにけり
まかんづる人と馬とに湯氣立ちて馬場(うまば)しらぐ暮れてゆくかな

□

河原に小さきあとつけ川千鳥悲しく鳴かんたまの夕ぐれ
砂の上にかれ草しきて我も又千どりと共になかましものを
たゞ一つつとまもらへし物影に秋のくるゝも知らですごせし
野に立ちてうすき朽葉の枯草にたゞ驚きてかへり來しかな
得ざれども能はざれどもこのこゝろ一つを守り我はゆかまし
くりかへしくりかへしつゝ新しく奇しくものを思ひつゞくる
文字ならべ悲しみをやるすべしりて涙すること數まさりけり
何となく泣かねばならぬ心して悲しきことを思ひあつむる

鴨頭草

木かげゆけば櫻もみぢのちりやまでのがれがたかる我一人かな
かはきたる音少したて地を走る櫻紅葉の小さきうづまき

□

涙して惜しむにあまりたうとかりもだせるまゝに今日をやらまし
同じ世に生れし外のゆかりなきわれにはあれど君か死かなし
今日一日ほのぐらき影世を蓋ふ君逝きませしそのけはいより
黑はくの中にさやけき面影の此世の外に在すさみしさ

(十二月九日)

L.

□

足はやく雲はしり行く冬の日は鳴く鳥にさへ心せかるゝ
子がさらふ三味に虫の音通ひきていでゆの宿の夜は更けにけり

I.

八重咲きの赤き山茶花一枝をかざして笑みてをとめ行くあさ
わがたまは今日も安けくいこふなり喜つきぬこのよなるかな
何となく只なにとなく君にわれしたしみがたし淋しけれども
みてづから一葉つみませこの小草君思ひてのなさけこもらむ
何となくつめる草の名ゆかしとてたれに贈くると友のゑまひぬ
身もたまもなべてまかせて大海の波にうかべば物思ひなし
冬がれてきえ入るごときわがむねをかけるとりにやことづてにせむ
若き子と老ひし女と二人いてものいはですぐ一日かなしも
遠く行く友を送りてあかつきの小松が原をうなだれかへる
月影にそむきて立てる岩の上に一人うたへば夜はふけにけり
百合の咲く谷一面にもやたちて静かにきたる山のあけぼの
何となき心安さにしみ〴〵と秋のはやしに歌をうたへり
さら〳〵と落葉の音のなつかしき林を行けば心たのしも

逝く秋のあはれをかたるもみぢばは風なき空にほろ〳〵と散る
風なきにはら〳〵とちるもみぢばをつく〴〵眺めおもふことなし
ときはなる松にまぢりてもみぢばのいや照りはゆる秋の庭園
露霜にうつろふ菊のいろみればわが身しみ〴〵かなしかりけり
ものみなのかれたる園生なみだしてうつろふ菊に見いりたるかな
現ともおぼえでたてばもみぢばはほろゝちりきてわがまへに落つ
しめやかに秋雨けぶる夕ぐれにさびしくひゞく遠寺の鐘
思ひだし谷間にぱつと日の照れば生き甲斐ありと光るもみぢ葉
紅葉がり雨後の山路の岩かどのぬれたる上に物思ひする
武蔵野の秋の夕を若人の星光る方にさまよひてゆく
星光る野路を歩めば人等みなふりかへりみす若き三人に
玉川の河原に人等むれあそぶ夕暮一人我の立てれば
水溜り芦など生えし玉川の川原に秋の夕陽は照りにつゝ

緋のきぬにつゝみてありし母上のますみのかゞみいはれありなむ
紅さして鏡みし舊のをとめ子のわかさぞいまもなつかしまるゝ
をさな子は母の心の鏡ぞとおもひてわれはをのゝきにけり
母上のかゞみの面にいきをかけいろはをかきし昔なつかし
いざはやく鏡とうでゝ七尺の黑髮すかせ秋來といふに

感想

富津より

つくし

まち子様

私は今海岸をあるいてゐます。いつになく早く眼が覺めましたので、氣持よく寢入つてゐる皆をすてゝ一人外に出ました。はだしで踏む細かい砂はひんやりとして足から頭の奥まで冷さがしみこみます。こゝは内海で寄せる波といふ程の波は見せたくもありません。たゞチイツと耳をすませてゐますと、かすかにチャブン〳〵と波同士がいかにも人に憚つてお話でもするかの樣にさゝやいてゐます。たそがれや、小狐貝や、蜀紅錦といふやうな貝が露にぞんぶりぬれて、ぽち〳〵こぼれてゐるのも靜な朝にふさはしう御座います。沖の白帆が動くともなく動いていつか小さく姿をかくしてしまひます。自分の足音のぴたぴたといふのだけ聞えるやうな靜さです。

私はこのまゝ足音丈をのこして、歩いて〳〵知らぬ國に行つてしまひませうかしら。

○

外海へ出る道は砂丘が一寸の間つゞきます。ちよつとした草や木がありますけれども、私は何故かこれを砂漠の樣に考へ、そこをとぼ〳〵と旅する自分の影のうすさをしみ〴〵眺めてゐました。砂丘のくづれた所に野苺がよく熟れてゐます。あなたはしみ〴〵これを味つて御覽になつた事が御座いまして、ポツツとかむと細かい種が快よく齒にあたつて、一寸酸いのはどうしても野の味ですね。河原撫子が薄に似た細い草の中になよ〳〵と咲いてゐます。赤い鳥井のお稲荷樣を右に見て、十間許行けば紺青の海が大手を開いてバアといひそうです。つまだつと、ころがつてくる白い波頭が此から泳がうとする私の心を強く促へます。帽子を少し氣取つて冠つて海の中にとびこんでゆく私を想像して見て下さい。

○

富津は唐茄子の名所です。朝霧の中から形のよい